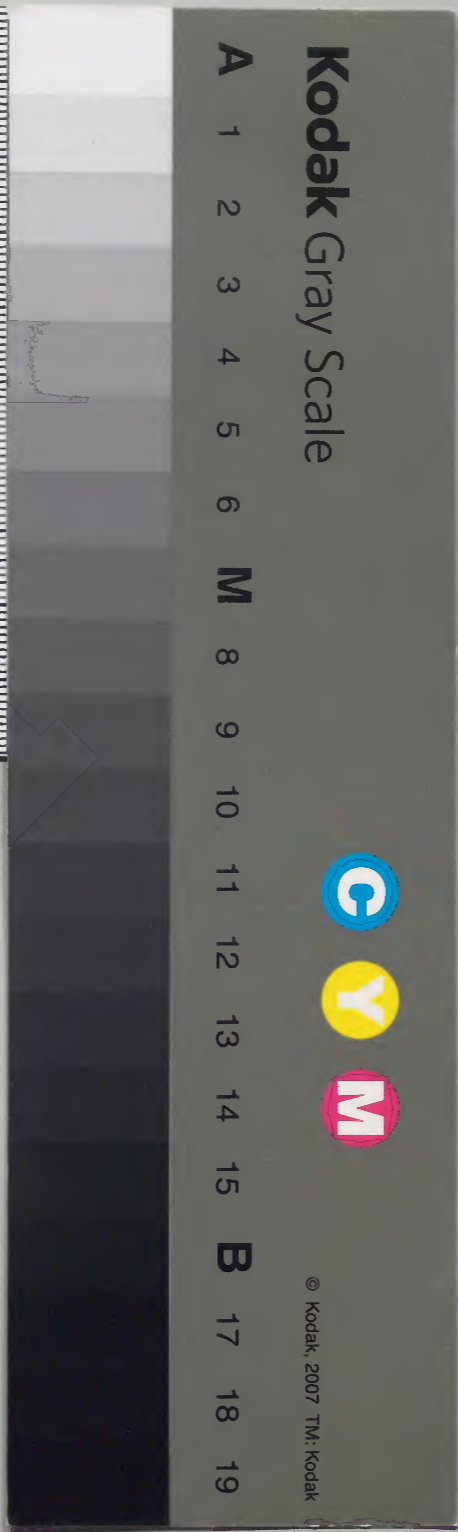


和書
 法書
 三冊

和書門類		
二七九	二六號	
一八七	函	
三一	架	
三冊		

庫文閣内		和書類
二七九	二六號	
一八七	函	
三一	架	
三冊		

内閣文庫	
番號	和 27926
冊數	3 (2)
函號	202 225



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

蕉翁の誦勝誦勝の河をどいりぬる事ありはせぬ

六月の暮りよをかくわし

今安んずるは浪波の底柳舎柳舎の句句に。六月の暮りよ

日。嵐山の心とそめむもまに。天を凝凝てゆくは

あまの嵐の心とそめむもまに。天を凝凝てゆくは

あまの嵐の心とそめむもまに。天を凝凝てゆくは

あまの嵐の心とそめむもまに。天を凝凝てゆくは

あまの嵐の心とそめむもまに。天を凝凝てゆくは

朱紫朱紫卷之二

小町小町三

東都 法橋吾山法橋吾山著

言水言水ははも藤藤藤藤の定定のう

酒のこもあくよう思ふやうにききぬふと句の心は源氏の
きこハ元極と初老の執とそりちる人の。是文彦秀も言
やうに生おひこちて風のきこひまは風の下花ななくさきあやまら
まをねを成まてまへ

ひらく
る月の
るるる

○ やとくとあつひよよ月乃を

十の朝や海をたかからか少のやれ言

かあするにげ一少の句ハナハナの月れ山のえヤけお
けいのぼつて心のぼはんれこと。そ終を又ひるまは
うく一れは海をぞ。一天そるれをんよりハ杉西白
さける。ほの白ハさむいとやけしてなれらるす。

いれおすうやげあまははれてあるが面ふ。されどめ母
たていんふをあらひ。さづかを申に一天めくすなまは
いさばらとの言れ言といふして海をあらうことにはけ
ねどさう。海をハねみ交付とのまて。是七物ざん時ふあを
かむらやなれもう。ねとひあをせしれあるべ

今事とれ新古今集秋下
雅經

みより乃山は杖をさよゆけり古なり

みより乃山は杖をさよゆけり古なり
とよんちの面め新しんまかよひ。げ山乃杖をぬすのうれ小石

擗て我母をさすはもわらば福應のうき世をものごと
調書ふある坊をり難い。吉野山の元徒むうし、
岩菊丸 を銭のうりゆき世をり 童形めて純約せり。そのま
風を銭の比まで有り。今、清僧とる。台斗をよめて云。近
中、の意の白尾集ふ。やぬ、打とせぬ申のうり、
事云、欲連ふよ。礎打と、ば、も、侍、も、
悟をもとす。於、誹、諧、の、流、義、
秋 あき 比、夏、と、一、札、お、め、と、い、ま、の、
の祈禱の札をぬれぬるものと、
謬 あやまち ねり、ハ、校、合、ある、は、る、れ、と、
その一派の法正は必

他より、
と、
きぬ、
楚 つと 流云、
あて、
漢、
の、
順和名、
取、
用、
不、

たやゆ。十六夜は月れもあはしめ十日の曇れし月夜
やとまを何きつけけんあらず鏡想の句なりや

月鏡る日か海泡く山くれをふ澄すらん哉

る方しう鏡あしをふぬ日す曲白手

今案すれ糸箱松路八歳もと私面とて時あらず海くま
げ日八並うの春もたれ方去れのおりけく山く六徳をれど
室生はうしこぞうも候もあつしるをいびりふ小種は其
名をあつして候つて一臥えられざるも一入又ぞこ海あて
ぬれつともあてをさるるをいへばう
いとむしうるを屋しされが春あむおもろれとせしむる

室生をふぬ日すや曲あらず踏句なりて意あはらざるなり

補此句意は深州の元政よりいへば中くそれをのそれどてもおもしろぬが
のそれを此秋の如くきてと及びぬ物と打めてくの吟はもとといひ
が再案す小秋をさうても一段まにあめて地せられりかては文の
柄はすれ風格は背りりと改めてかたりは

その中をいへば宗祇乃やとら哉

さう桑葉にふよふるもいへるもあ

宗祇法師の教句なり

世ふるゆをさうれと積の中なりん

宗祇自注は子さうらうとまのちを松れ屋まきくと
るるしうと礼かや記しぬふ今案すれは此安二陳院

漫改らみ一之刺古今集に初志くきふやありこ乃こころ
世よあやむららね一まものを柱の座れ時毎いいでやと
とづれずと誠よ申秋を庵つづすま妙なるよの翁乃
發句もそを稱羨して無季以て季を合書せむ物
骨折らばして心の働わる場まこと感あやけは芭蕉菴の
一生のそ存るる座一や杉風のぬ一語りやされ一と

圃深川蟠龍山長慶寺小杉風祭起して此短冊を壺におやめ墳と築
て祭句塚と号くこれより五十四回忌は高アヤ柳居先師びう一を
恐ふ涙け家の茶系を分て古墳を再興なりぬ其日途道小連り
門弟子を見つこれ今日より又五十年経て百回忌にあそこの山
賦べしを宣ひい今や五十年昔の思ひのあやえ一人を指す
我老不いを解な一秋風も冬共共にあきて存命なる門 慧卷阿
霜後三子の、物ゆりあう一天明三癸卯十月十二日祖翁九十年に相苗
れり誠は翁の言徳今又いへるをあるねと老はれひうり成増んも追福の

微志ありんうときまの意味も同じふさうして一
家ほとと種れくまはうりも村能ふられ却ひうりを先ん心半を忍むの

茶翁のいさげくりり中氣講

今葉ころる句のおもてハサカしやうちる花庵
をいひ流一裏のんまの和師念佛毎回禪天慶と諸宗
其琳さいせき存せししや建川の句茶翁合あてを茶翁摩忘十夜も茶翁
たれ源たを味ふべ茶翁

茶翁のいさげくりり中氣講

今葉ころる句のおもてしやうちる花庵
をいひ流一裏のんまの和師念佛天慶と諸宗
其琳存せし建川の句合てを摩忘十夜も
たれ源を味ふべ

いつたれれ世ちうりうり月を秘すり時由たれ
けををいひよつてうのつ徒乃尼入道いんに徳とく湯ゆ仰おほのうら涙なみだ

面を時句うつてあはれ。の又文字感深し。そととて字解を
あつる宗風よあはれ。おも智恵すそをさす。如來の恵
祖師の悲徳哉報也へーとさし入る風情を詠む。と云ふ
をりとの。句情深し。

星降れ園をこよとや啼きさる。

今業をば母河。海は尾張の名はなり。嘆絶深し。月乃夜
乃海の園まで。あつる。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
名も何れぞ。そむと云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
乃中へと云ふ。げやの。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
や。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
神 素堂千鳥掛集の序に云。乃海の何某知
足亭小七友芭蕉の翁やと云ふ。以爲海なり。

此変名古巻熊田は近く業名大垣にも又遠くは子名をば。乃海は乃海通いて
妙生を道くんと。乃海の子をれ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
之れおとく。乃海の言を。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
昔して。乃海負巻。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。
芭蕉庵小文庫冬

古きそ代志のひく

霜のほけ子さけれ大桶くれ

介業まゝに拾遺馬草 定家卿家集

おさやあ。これ系のおさ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
此奇ま。乃海大桶の。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。
電。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。
おのほれ。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。乃海。

ぬふやどくは教風葉の地乃讀むやあつむ乃よあぬく
要ひまぐかうげ草のそふおさくするおを花と見え
むしハ那二面四のこやんくゆるむ志うゆを
嗚るや美詠一始人ハ茂叔を蓮説ふ菊花之
隱逸者也牡丹花之富貴者也蓮花之君子者也これ
草をばよくいんそそ葉ふ牡丹よ上いきて草を結うり
なるとなりげんも大相をつよくいんそそ下いひをけかこ
せうまうちの史邦蓮葉のそをすひそるハ小文庫編集の
此ハ師没後収るそふれは漢す解や全ちとハ元祿のむ
く丹遠くこーむあつうう号論もおきぬあへーの

早い木才といひ物格の中ふれは後漢のこくう多う
の改むを僕ものなりもあつううと供のいし志ぬい
又ハ相の火れえかやゆるとさうかかしくいなるての吟よ
やせこひいぞくぬふ相も有れ風格あつば又相木かの
花を画れこのゆの相の縁よあつての物教事りての物教事
なりとらや是もあよあつて乃ばううととやうあつて
こいを枯もさ花なり必疑を贈まへうは縣人かといく
知りて進ふ年も師ををさうてみ霜枯よひとさるる
を抄詠め侍りてすこふやあつては清身にてかおる
残ばいぞ知せ給いて霜やあつての系詠め

やや。一きびはらの郷を感一なると。菰もよよく毎了れ
けはありと婦一い。其慨一傳らりけ

えんまいがちやうなんのあちをいふ
山家集の歌よむらふ

一 菰もよよく毎了れの歌

今葉すふ山家集一 西行法師

持もていのらとあやう人いからちのこひをむてく
長男い見かり中死よあくる。父花菰いあやうのこれ。バ
子の涙をこころにてもてはくか。長男念とあ一て救ふ
事あつじぶと人の家の女かいてるさ。あつじうらう

深川八郎の歌

茶葉よ名の伝やかけ以中

今葉よ名。茶葉よ名。中死よあくる。父花菰いあやうのこれ。バ
子の涙をこころにてもてはくか。長男念とあ一て救ふ
事あつじぶと人の家の女かいてるさ。あつじうらう

中あ一きんの事なうらうらふとて

茶とやこいし師老の名月

今あすふ。いけうのいそひよあうらふ中をなぐさめん
とて僧おをいそずい。ま師老の名月うかと。あつじ

爰日記本

有明とみろくみちくし條のおと

善好は師より

あうとくに人よきまの身のはらや

ちりね者 みろくみちくし市街の月

今あるはふげし色好お茶にそは程好傳ふわの地

みろくみちくしあまほの月とありおれ白月生明と

さしけりそとて妻も首の月や去捨し

かい正月廿八日の夜までみろくみちくしと清きを我

師走の廿八日の白く。草庵よその言をきつる

哀ふし。此句自著六月とらや。さうのおちくしあり。

有明も、再案にや又支考引せして裁する。未考

ぬと人よあつねもわり年のくれ

今あるはみけ句小純て話あり。高野蘭亭八十六歳の比

より同日とあり。生得傳化のまて人よて其名を。一日

門人果語ひらる。梅干よりよ。言あを終ありや記し

き。二袖を破ふま。つ人。いりく先生。詠指もこの

あ。あ。言そ。あ。よ。又百里ハ好傳。こも。あ。さ。て。好。し。は

あ。ず。只。色。意。ひ。ろ。う。詩。弁。の。風。符。の。越。ま。き。ら。ん。て。人。を

感。ぎ。ひ。る。の。化。あ。ら。る。年。の。際。お。店。を。録。し。し。る

迫りくるに極び曉あやよりわけてゆくは秋あきの邊へに來りしを不
おちてふもあつらふぞを我われ歎なげかしてゆく渠みちまを正ただする道みち
不迫せまらずもその形かたちを庵いほをあかすてそ終はる人ひと足ありやと
多おほしつ。物ものよ託たくしは思おもしては驛はしぬふ方かたなりや清きよくは
とぞぬすびとあつたねむあつとやかへり我われ懐なごむもけり
をいふ物ものの欠けきととる夫とよ方の賊ぬす人の機はかりは年の暮くれ
水みづや下の白しろ筋すぢをへるは筋すぢ下したり

今いま葉はを非ひし分ぶん七しちのとしやをへるは筋すぢ下したり
今いま葉はを非ひし分ぶん七しちのとしやをへるは筋すぢ下したり

うの著ある再また葉はめや。季き吟ぎん法はふ印いんのいも。子の年とし七しちの年とし
鳥とりの十じふ支し難なんくむう。元もと日ひの句くよ季きをわらへり。近年こんねん
不用ふよう之これ云いふそはとて昔むかしやうり。句くも葉はの暮くれの夜よ之これ句く
け男おとこの舅おやぢある夫とよ婦めかけを祿ろくふとて。盡じんるは解げぬを海うみ背せ
ちりとおひて。然しかくとも山やま坂さかあはれは林はやしあはれ山やまあはれ家いえ境さかいある。
此こゝの人ひと正ただ直ただ一ひと偏ひとの生なま實まをそ假かりめを禮れいを。此こゝの味あじのいり
義ぎ信しんそかへりてを稱せうる。詩うたが塔むらがたをいれりや
あはれ。又またそへてかあつて言こと外ほか無な窮きゆうの感かんあは

朱紫卷之三

東都 法橋吾山 著

○ 吉野の八幡七郎のうらちの金の御嶽と稱すあるは
飛鳥井臣相雅章卿三月十日あまう七日乃るふの
不入勢給ひて

中にもうたれぬむと満つるのよゝめ人おひ
伏川田井古昌俊の永井家のはまふ孫五の書をよ
村御の御を勵て武名を急ぐに林道春法印ふあし
仁義の力を学び里村昌琢法眼ももあつて連歌小長
小堀遠江を殿下侍て榮乃を寄るに御の夕も

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

送るに昌俊が尋ね

よりの心算をくくらの物とくんよくねむりぬる

古の二首をよめる手いづなり

古今集雜歌

在原行平朝臣

わらうそふく人わらすぬれ浦よりかこまつてはかた

榮雅抄よむくわらうそへ邂逅といふなり。又夏本を乃

中よおまふしつらをつらうとたよ云。鳥丸資慶卿八邂逅ハ

さうらいつらをハ病氣と誤りぬ。今抄にるよ。あまの

中に盡くする業あつてはあを妻とハ紅糸すねたむすうに

あつ。よて病氣と云之 補津本版幼燈草名不申いごあまいとあつ

人皆あれを賞覧せり。巻留書系をきついでよむハ自然うれしき
やちてうきしいとよむはびりねと書てさししゆせむ。漢方に叶ふ
らり。今葉留書系こまハ謬をえハわらうそに
くくぬるるれぞをついであかくりゆれ

相摸國大磯の宿をくくも又去町をわけて山あり。高藤山

やいハ藤原小宮寺をさる藤原寺と号す。里乃石もすれ

高藤村。又ハ山下宿もいひるハさう。民家二十ばうりも有

り。海をさる松系ハ諸越系といふ名取あり。ハ丸藤集ハ「東海

と海」の系はなりてしり衣をやうのきぬといふ人。古乃

衛道母て若狭十郎祐成ハ妻虎出初ハ比治の長女よて

稚名をて 呉玉の方言に於免ハ虎を云よて虎と名付せむ。せいに

りるも。さるありの原れ郷ようりて虎と名づる傳るとうわ

祐成討死の後尼平一めて

落とれし流し、後をきてさき尾むるよ秋風不ぬく
越前の三國とてふふ、小次郎のいひに遊女あはれる。朽りく
かひくは男まつるが二ねとやどらうで、曉毎まゆる女うら
うらみく

新水のいと恋こ海うやうこそあ

江戸新吉原小徳山といふ老妻あり。髪を風を踏出して、金七
かりや月と云。和方を好くよあや

いとせ山ある門のうき水とけくそやと、袖ぬれけれ

おろしく宿舎屋といふ老の許ふ。うねあといふあう。お新僧

六の遊女今初しる。糸のねぐれもぬく通ひきれらう。ねむ
情意殊小原うらう。六ねこくに啼りり。お夫婦いとあやこ
きづひを好いさうく。てをせざう。六僧ねひしや
堪よらむ。門あきうりて、自害まう。采女もあねねひそらに
給出て、清草系にむり。身を鏡が池に投う。松葉目
辞まあり

名をそねとあはひこそと、おれ格尺乃石を鏡に小次郎め、
伊勢國某が息女のぬといひおの。天姓和方をぬて秀忠
おほし。十二歳少て元禄十年正月うらうら。おれ。末期は僧
を法し。こが法名を松雪とよほはる。去し以松とよと云

題まゝく因けりや志なるのをあはれいつよりてもいまひとりの
名のあけやのと後らるるを悟りてむねくぬぬの少女
うね地才あつたれ半いける後多て肉體はさきこ
あしこの海方のうらみ首出さめみそねの事といふ歌を
あしとついで死せぬ人の再来もやとゆは志あひし
道きしる。一向派の徳龍十景中て越後もよるを武に
来る。道きしる。流祖の旧跡をさうて又を古詩を化す

高祖誕貴家幼稚喪双親死孝追日厚
出家九歳春壯年事空師宗派独傳真
德澤潤天地法化通帝位聖道年々衰

淨教日々新南北諸寺徒結寃訟朝頻
遂令法服脱賜姓因俗塵空師竄南海
宗祖北海濱北地道路險行程幾辛苦
經日抵此國岳訓救蠢民更卜幽邃地
困居其清貧樓神安養界常念佛真身
道俗向出要示以西方津五年送君諸
群機結淨因不患坐嚴謹喜度邊境人
聖代遇赦後興法轉空輪悠悠半千歲
宗風振四海遙尋旧跡者誰不沾衣巾
本曾義仲嫡子志水冠者義高母や乳母も亦ゆい

やど形見^{けいみ}杖^{つゑ}七番の笠^{かさ}物^{もの}を射^やてさくらし鑑^{かん}金^{かね}之旅^{のり}
装^{まゐ}き^まる^る其^{その}途^{みち}中^{なか}志^し水^{みづ}冠^{かん}者^{もの}「わ^わや^やき^きり^りる^る乃^のの^の事^{こと}や
枯^かぬ^ぬじ^じあ^あま^まり^りこ^こう^うく^くま^まの^の杖^{つゑ}あ^あり^りは^は信^{しん}よ^よあ^あり^りま^まり^り終^{しゆ}
海^{うみ}中^{なか}小^こ左^さ郎^{らう}幸^{きん}氏^し之^の一^{いつ}「あ^あい^いま^ま乃^のの^の事^{こと}あ^あり^りか^かき^き
ぬ^ぬ一^{いつ}あ^ある^るの^のあ^あは^はは^はひ^ひ一^{いつ}け^けい^いさ^さよ^よう^う一^{いつ}は^は阿^あ志^し水^{みづ}
冠^{かん}者^{もの}も^も幸^{きん}氏^しと^とあ^あま^ま十一^{じゅういち}葉^はか^かる^る一^{いつ}と^と盛^{せい}衰^{すい}記^き長^{ちやう}門^{もん}本^{ほん}
平^{へい}家^け物^{もの}後^ごも^もあ^ある^るこ^こう^う。あ^あり^りあ^あま^まる^る殿^{でん}あ^あれ^れが^がら^らに^に…
都^{みやこ}じ^じ頑^{がん}も^も侍^し人^{にん}あ^あり^りあ^あら^らる^るあ^あら^らや^や
南^{なん}郭^{かく}山^{さん}水^{すい}を^を好^{この}む^む癖^{くせ}あ^あら^らる^る。あ^あり^り居^いて^てあ^あら^らる^る東^{とう}の^の風^{かぜ}
多^{おほ}し^しも^も自^{みづか}破^は小^{せう}画^が一^{いつ}身^み以^も向^{むか}て^て杖^{つゑ}あ^あせ^せら^られ^れし^し人^{ひと}肥^い好^{こう}

隈^{くま}本^{ほん}小^{せう}野^の氏^し子^こ伯^{はく}修^{しゆ}と^とい^いは^はれ^れる^る子^こあ^あり^り。元^{げん}喬^{せう}率^{すう}一^{いつ}と^と後^ご。
夏^{なつ}小^{せう}本^{ほん}の^の山^{さん}中^{ちゆう}より^{より}あ^あら^らる^ると^と再^{さい}會^{かい}一^{いつ}遊^{ゆう}車^{しや}を^を談^{だん}し^し
目^め山^{さん}川^{がわ}の^の美^みを^をか^かへ^へと^と絶^{たつ}を^を唱^なふ
危^き峰^{ほう}迴^{かい}合^{ごう}白^{はく}雲^{うん}間^{かん}一^{いつ}路^ろ崎^き嶮^{けん}不^ふ可^か攀^{ぱん}
依^い旧^{きう}懸^{けん}崖^{がい}三^{さん}百^{ひゃく}丈^{ぢやう}臨^{りん}泉^{せん}寺^じ裡^り老^{らう}僧^{そう}閑^{かん}
この^{この}事^{こと}を^を書^かき^き通^とめ^めて^て東^{とう}於^こは^は若^わき^きた^た。息^{いき}仲^{ちゆう}英^{えい}と^とい^いは^はれ^れる^る感^{かん}歎^{たん}。
風^{ふう}義^ぎ格^{かく}調^{てう}他^たの^の人^{ひと}の^の賜^{たま}は^はら^られ^れま^まこ^こに^に子^この^の事^{こと}あ^あり^り。先^{せん}と。
會^{かい}後^ごの^の次^{つぎ}に^にあ^あら^らる^る信^{しん}り^りら^らる^る晋^{しん}の^の羊^{やう}太^{たい}傳^{でん}死^しして^ての^の後^ごと
あ^あら^らる^る海^{うみ}の^の名^なを^をあ^あら^らる^る一^{いつ}と^とい^いは^はれ^れる^るあ^あら^らる^る事^{こと}あ^あり^り。
臨^{りん}泉^{せん}寺^じハ^ハ夜^や更^{せい}山^{さん}と^とい^いは^はれ^れる^る

洞家の中興月舟ありる時通多して源誠ゆは日
昔ればこわれ草花ふやどり **秋** あらう **感** 感
先翁ありし **和** 和尙より白し **禪** 禪ありし **詩** 詩作るへ一絶を
此 此と云。月舟詠して **詠** 詠や **柳** 柳子菴とし **白** 白額あり
即 **可** 可 **賦** 賦 **一** 一 **云** 云 **カ** **ス** **キ** **リ** **ト** **云** **ハ**

投宿暖峽柳子菴半菴清燈語江南

ついで **源** 源合の二句 **ユ** **ス** **ア** **リ** **ア** **ラ** **シ** **テ** **流** **石** **母** **子** **人** **の** **い** **と** **く**
夜 夜来風雨 **忽** 忽地起 **紅** 紅葉秋成 **一** **二** **三**
と **附** **し** **も** **柳** **尙** **志** **と** **一** **流** **石** **母** **子** **人** **の** **い** **と** **く**
消 **う** **勢** **も** **花** **々** **し** **る** **京** **上** **に** **ひ** **と** **る** **中** **せ** **り** **ぞ** **の** **う** **こ** **露** **生** **門** **の**

鬼の詩もくたあぐいよあけき

吸月庵時亨ハ。東都の西橋毛領末吉村也といふ小自
耕を連袂らん流の末一と分ておく **東** 東都 **お** けて **遊** ぶ。
いつれの村あり者 **入** 湯嶋 **か** 門 **人** 月次 **會** 談 **備** して
宗通は **指** され **徒** 老 **と** **も** **具** 世 **く** **ら** **あ** **て** **廣** 尾 **原** 成
る **に** **お** **ふ** **一** **面** **存** **の** **ぬ** **る** **た** **ま** **い** **く** **と** **外** **り** **れ** **ば** **い** **つ**
く **有** **け** **る** **松** **根** **小** **腰** **お** **も** **志** **り** **一** **態** **て** **其** **日** **の** **夜** **發** **句** **と**
ゆ **る** **一** **可** **の** **か** **ら** **み** **詠** **き** **や** **勢** **と** **志** **の** **こ** **義** **や** **は** **是**
は **終** **ぶ** **く** **ら** **に** **勇** **藤** **か** **ら** **女** **さ** **ら** **り** **て** **先** **生** **今** **を** **い** **あ** **ふ**
なく **去** **て** **あ** **の** **と** **と** **ふ** **時** **勢** **希** **か** **ら** **女** **か** **ら** **と** **ん** **と** **ん** **と** **ん**

雜髮して僧と西山の養生院に末居せり **志**

金荷ふ小ばけといふ詞の古き事し。天曆。帝梅壺小浦

比類對新をなるとく。 **左政大臣自信公**

山人のあまの若は若く女おほくのうへははまんと死す

浄区一浄製

とこのことおまんと **すか** 於を看あいにまぶつてはさうもさ

後撰和歌集にある **今案** けし御製も万葉集長歌の中におまんと

重荷ふういひといふ詞をさうして後世はさうも

浄区なる也

夫木集 関 埴河院浄区百首 埴原法師

わるといふはさうなるはよほの園れらぬきとやうにさう

徹書 記住吉系然百首といひてはさうのさうれらぬと浄

今案はさうは應仁別記といひて北の浄川右米門。伏義乾

堅めらぬが敵なすはとて勝元の方へ差向ひ入江敵乃釘

貫とまゝ春院の釘貫と柳原一口を差固めらぬ。富

小路の釘貫は富樫鶴童丸持さう。又平家物語 **卷三** 少將

がゆりの糸とてさう。蓋を裏抄といひて町くの城戸釘

貫といふ人を登せしとて釘を打通して根をむきだ。原

釘貫といふ

詞 貫といふはさうなる。早暮といふは歌あさく成橋

同文の **中** 順徳院浄製八雲抄 **古** 平

信通よあねの^{しん}ぬき^{あね}は^のか^の物^はに^けん^はま
を^おと^ひふ^のと^けき^げう^の冷^泉故^臣相^為久^郷序^批
云^に。さ^すぶ^とま^は二^を小^仕多^る詞^かん^と。道^遠院^実隆^公
ゆ^る序^をれ^やく^しれ^夕月^初さ^ひか^らう^ハひ^かく^む
い^はく^山の^夕月^初え^まと^る序^のよ^めび^きあ^らむ^は
ゆ^らと^とて^又こ^のた^け夕^月初^よか^らう^をつ^ふ序^と
云^をい^いつ^た而^すつ^ぐ云^を或^人云^後撰^集龍^別の^ます[。]
ま^のの^ふま^うり^り序^人の^趣を^つら^とと^てま^けけ^る
後^撰之^まり^のま^うら^くた^らい^のり^わり^あら^はん^か致^す
志^の海^をね^むり^ふけ^はん^ぶ物^の名^を録^入し^り。と^と

大^か柄^{がら}と^石と^小刀^のむ^ひま^をて^大を^さら^しめ^して^しや^記
ま^る。吾^つら^く考^るふ。為^久郷^の批^を理^よま^らう[。]或^人の
説^いと^まる^来ら^う。後^撰集^春部^よめ^くし^に
か^らら^く一^まは^かう^はく^ます^ふ家^おれ^その^母等^をめ^く
す^にま^りふ^中法^を記^よせ^どて^はさ^りや^うめ^やし^經し[。]
ま^うと^かい^まう^す序^なが^うの^略序^なう^まら^がを^約め^て
す^にが^やり^ふ。志^の二^音を^切せ^ばさ^やめ^くさ^の…延^の語^ハ
ま^うく^志の^約序^ハさ^く古^人切^韻を^考て^いふ^ハあ^らね^ハ
あ^らね^ハ。自^注ふ^のこ^とか^らま^け玉^の云^語乃^ハ
妙^られ^不之^是よ^記す^おほ^うを^我玉^の云^語小^中法^を

略語あり延語あり約語あり略語あり古今の變語あり
是の半をつまひはふりたまひてハ之語も通名也。又
又さへなといふ語を漢字小うつせ然尙の二字ありあはる。
俗よさふあきどもまじやえに因。流石い也ハ世傳字と
なりふとの又蒙求の孫楚が故事を附會しそ我我
流けども迂いき少りて能く外いりたりとせやる。又えちりふ
うちてたぐひの分よさすぐせハ助治のさへいぐりハあらず。
腰刀乃半いなるもそきをさぐるずといふ半よ云けざる
までの半いみしハ今のそれども武士も大小とてあ刀
は半することあり。腰刀とて又長や又と寸より八九寸を

うりの短刀を帯いさう。柄こまづんつハ入いき。今も様樂さら
ねを師といふ者大名のまいりちりしはりてある短刀いなり
ちの半刀いを云げさやみきけの城いけしをさやあきこ
いふい下てさき満いさとも云げおハ人を判いり費いくおのいま
ならぬ判刀いといふ半いを略いしてさへいとハいいえいいみし
の風俗いさすかハハ大い打い儀いを付いころ。大い打いの具い城い入いれり。
小刀のいひいあて大いをといころやえハい流い之上い古いなる火い打いがい

ハありれ流いはいしくい仲い磨い明い刀いして流いりいといふあは
うかづのい名い成いといの住い居いみいくいなる白い城い眉い山い月いのい行い
や回格いなるへい定い家い師いのい儀いのい系いといびいれいはい儀い

略語あり延語あり約語あり略語あり古今の變語あり
是の半を記しつれまじりては語は通じざりし。
又さへといふ語を漢字小うつせは然高の二字ありあはれ。
俗にさふあきどもやまじやに回し。流石の世居字と
なりふとの又叢求の孫楚が故事を附會しそ我我
流けども迂き少して能くれりともやうに。又さへりふ
うちてたぐひのあまきすぐさそ助給のされぐりあはれず。
腰刀乃中なるもそきをさぐるすといふ事よ云うけざる
までの事いみじい今之れども武士も大小とてあ刀
が帯するところ。腰刀とて又長又さすより八九寸を

うりの短刀を帯さう。柄やまじつバ入る。今も様樂乃
ねを師といふ若大名のまじりてある短刀なり
ちの字刀を云へばやみきばの城付く形をさわあまこ
いふ。下でさく満さとも云へばお入を判り費くおのの
ならぬ判刀といふ事と略してさへといひあはれ。いみじ
の風俗さすかあはれ大お袋を付ら。大おの具城入おる。
小刀のむひひて大をとらう。こらやえは語之上古を火打を
春庭摘語よい。仲磨明列して御らうといふあを
うかづのあはれ。庭の佳境あり。白ヶ峨眉と月の詩
や回格なるべし。定家卿あはれの系と改らる。は情と

おぼろげな月夜に
おぼろげな月夜に
おぼろげな月夜に

十五夜 ひとせの月をくもりてよひの 宗祇

今夜之又の清光にやどとむらう 待客の才人もてあそぶ
そのうれしき志高且一天は浮雲おほひて月乃宴ころ
あそぶ歌を歌くかくはひはるもれらる 其翌年の
十五夜快晴ならう 又一ひと望の月をくもりてよひの
やどいおもしろ程ふあふ 待客の才人もてあそぶ
同傳り 小宗祇あそびて 今宵の月光のいさめぬもの也
たの光は二年中の月れ彩はけあされて 文にえられたが

ことごとく 去年の秋月を思ふはひとせの 眼おの良秋の
なやまは年中の月れをうんとやされとぞ 志うはあれど
未練の心先覚悟なくして けしさをいよいよ ばあし
ぬて 正義ふけり 及たぬさうひやん けべ

柳營御會

八百日 徳源松茂世系 昌億

今あまたの月をくもりてよひの 宗祇
やどいおもしろ程ふあふ 待客の才人もてあそぶ
そのうれしき志高且一天は浮雲おほひて月乃宴ころ
あそぶ歌を歌くかくはひはるもれらる 其翌年の
十五夜快晴ならう 又一ひと望の月をくもりてよひの
やどいおもしろ程ふあふ 待客の才人もてあそぶ
同傳り 小宗祇あそびて 今宵の月光のいさめぬもの也
たの光は二年中の月れ彩はけあされて 文にえられたが

詠諧

葉すふ定家郷以前古今集小夫の系とあり。この郷の
およひあゝ新事あはれき

十五夜 ひとせの月をさるひこよひの 宗祇

今夜之又の清光にやうとわらう 待宵の才人むてあそぶ
このころよとらん志高且一天は浮雲おほひて月乃宴ころ
あゝ新事を欲くかくいひはるもれらう 其相立年の
十五夜快晴ならう 又いひと境の月をさるひこよひの
さしあはれきればは風種ふあふ 徒士のふりくさひて
同侍り 小宗祇あゝえて今宵の月光のいさぬもの也
この光は二一年中の月れ影はけあきれて 文にえられが

こころ 去年の秋月を思ふひとせ 八眼おの良秋の
なりは二一年中の月れをうんとやされとぞ 志うはあれど
未練の心先覚悟なくして け跡をさしよる 芭蕉のあはれ
ぬて 正義ふけりあふ 及たぬさうひやん坊へ

柳營御會

八百は性深松篁世み縁 昌億

今あまもまげうはてあをその字なり されども向中の
やうだのむくもく 出まらぬものくはまぐの好意を
よくうへふ事なり

詠諧

奈良七々七堂伽藍八市様

芭蕉

古風なれども而る波な〜や〜

回文の秋乃半

順徳院御製八雲御抄小

古秋小 むらさきよまはれる〜

花乃ゆ〜ゆさくらむらさき

さくら〜ゆさくらむらさき

大〜ゆさくらむらさき

〜ゆさくらむらさき

秋乃おとのよれ〜

きつらえんあり。げ〜。全浙兵術

少り兵書よ。日本考の部をきて日本の事と記し〜

和文をも教首漢字を〜。秋の意をも漢字を〜

たり。是日あ〜。秋のゆ〜。秋のゆ〜

かりや乃秋そのかりあすこの秋ある。是日本のゆを〜

り。知て。明朝乃謀略の助とせんがなゆ〜。

琉球人の秋

中山王子倫恒

おひてや風のあ〜

中山王子倫恒

人こりい〜。富士山

今あ〜。琉球の三ツ山。山南。山北の三王

あり。ほま山を誠まこととて。其國を保たもて。流りゅう改かい王おうを中
し。中山傳信録よ。舜天日本入。皇後裔。大理按司朝
公の男子と云ふ。是は西八郎為朝の子にして。仔豆の
大嶋まで出生の人と云ふ。國朝こくちゆう高たか章しやう録りよくよ。北井原きたいしん志し
あり。琉球玉の銘西八郎為朝の末裔と云ふ。今も其玉を
為朝の遺跡と多しと云ふ。東山殿の銘も彼玉にハ
我玉の假かり字あざなを用ひしと云ふ。又其國の人と云ふ。其玉乃
和号を能あたとるもの少し。其玉と云ふも美しき玉なり也。
新古今集雜部 前大詔正意圖 又其玉の形と云ふ。其玉の
半も中つらう。其玉中つらうして。傳りらる。其玉の

右大將賴朝 みる所のいそぎ志のぬえをいぬり。ぬり
つらう。よはふのふあ。今も其玉の擬集古録よ。壺碑つぼのいしは
陸奥公宮城郡市川村の南乃圍あり。天平宝字六年十二
月一日や。河内と云ふ。其玉多賀城壺石碑たがのいしなり。或人あるひとの
壺音つぼのね紺くろ也。壺つぼふあ。其玉と訓す。一。西維さいい玉たま畧りやくの
里り程ほどを誌しして。其玉のいそぎと云ふ。其玉一。楷書かいしよの字
形似かたじかく。新玉の終つひよ。其玉の和訓までを誌することあり。
此説このいひ述のたまふ。壺つぼ和訓わごんッ。ボ子し今いまツ。ボヤやハ。下略げりやく之本邦
の人。古人用字の格かあり。其玉の訓ごんの相通あひたうよ。其玉の壺つぼ
壺つぼ坪つぼのへらなる用也。其玉一。泥どろ心こころを。其玉の古野ふるのサさ方かた也。其玉

赤石香椎檀日舒龍借飯のこくく。一際漢字の理を以て
本朝の故実を失ふ事あらざれと古人の所法せしむるハから
事ゆへべし。又國界の里數ハ○去京一千五百里ナリ云
系ト大和必平城ニ至ク續日本紀曰天平宝字五年
十月遷都于近州保良即樂六年五月後都平城一千
五百里ハ今の百七十三里二十二町ニあり○○去蝦夷國界
二百二十里云々此の界ハ岩瀨郡一圍是也舊石衣關之
は之を陸奥の東海ニ在越後のえびの川えを以て稱し
陸奥乃え之が東極焉と云日本紀續日本紀等に委し
二百二十五里ハ今の十三里三十二町ニある○去常陸國界

四百十二里常陸玉の界ハ菊田郡園田駅の西俗に切通と稱
する所是なり舊大志古曾關と号く四百十二里ハ今の四十
七里二十四町餘○去下野靺鞨國界三百七十四里下野玉の界ハ
白河郡白河城の南二所神祠のあり不足なり二百七十
里ハ今三十一里二十五町餘葉山葉山ハ今一里今ハおめてハ甚近
道路改り甚也の度○去靺鞨國界二千里靺鞨玉の界
はハの肅慎なり又之を越くの小程多し委しハ
日本紀より云々三千里ハ今三百四十七里八町ニある
近年國花佳春耕著す糸切齒云千梅千梅編集のわをを希伊
良塵崎といふ不ハ志摩國南海の果行て冬ハ

伊と云ふところごとく地方と云う同郷なりとも同名あり
右の如く後縣の宝曆十二年志摩玉の海をこちも大正
系を考ふ哉と云ふもの之れ考のむとくこの島は冬河
玉渥美郡の内の今もいふ村ありて其處をいふと云ふ
伊は胡神社ありて系神味詳ゆまの末社ありて伊智宮の
遷宮の翌と云ふことふけ社も造営ありて二十一年乙未
文之里俗の大権の神や崇む祖友報答氏村也とて
御朱印を授け大綱鯨魚乃半をばさざとらやとて

杜國々唐を尋く

麦をえてこれと云ふおのちけ村 七世代

かきまゝにみ核さくかり 越人

臣はを登る大乃麻うりて 野仁

大くちの島村ありて
け里をばびとていふ事むり一院のみことの
わちをせ給ふ地あるよりいふはびとて
よ一里人のよりけりいふの文ありて
とめとていふはびとていふ事むり

かけをそとけり南中

此の島は島村ありて
島田姓は島村ありて
梅つとていふ所ありて人保美の里

いふと云ふ所はとていふ事むり

いふと云ふ所はとていふ事むり

武陵芭蕉おぬ桃青

け真蹟ありて
け真蹟ありて
け真蹟ありて
け真蹟ありて

白八再京如厚...

三河國渥美郡伊良真崎圖



吉田
光彦
岩屋
大津
大津宮
小松ハラ

（無）

三河國渥美郡伊良真崎圖

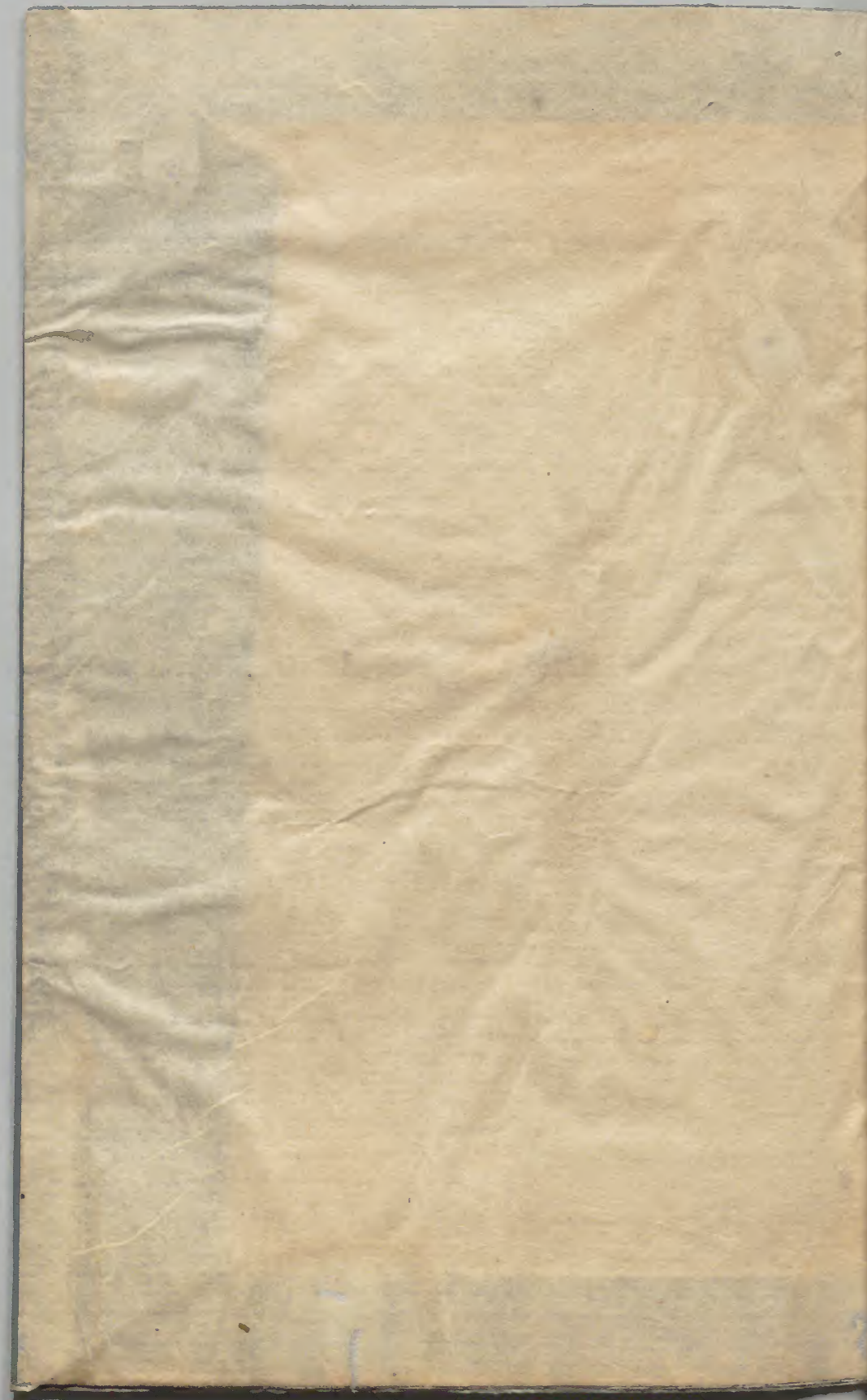
吉田ヨリ田原
リた天は...

田原



吉田
田原
阿志神社
祭神木花岡
文徳実録貞観二年八月
十四三河国献銅鐸一高三尺
四寸五分四寸於渥美郡村松
山中一糖之
或云是阿育王之宝鐸也

東觀者
小松ハラ



Handwritten text in a cursive style, likely Japanese, is visible on the right page. The text is arranged in vertical columns and is partially obscured by a large red seal.

